

誤解と思惑が交錯—メディア法をめぐる国際批判

EU 議長国ハンガリーのオルバン首相にとって一世一代の晴れ舞台となるはずだった EU 議会へのデビューは、苦々しいものになった。冒頭から激しいヤジとオルバン首相を批判するプラカードの波。EU 議会政治集団各派代表は激しい言葉で、オルバン首相を批判した。なかでも、「緑の党」代表はオルバン首相をヨーロッパのチャヴェスとまでに罵り、オーストリアの社会民主党ライヒトフリードは「体制転換の自由主義者が全体主義の彼方まで国を導いている」と批判した。社会主義者と自由主義者のグループを率いるマルティン・シュルツは、「ハンガリー国境を開放したホルン・ジュラのような優れた政治家がいるのに、それに比べて」と批判した。さらに、保守派を代表する形で、ハンガリーのボクロシュがメディア法のみならず、憲法裁判所の権限縮小、国立銀行の独立性の侵害、パーリンカ製造自由化による租税回避の奨励、ヴェネズエラの独裁政治のような予算評議会の解散、ボリビアのような私的年金の国有化の批判を行った。

FIDESZ 政権によるこれまでの立法プロセスは前号でも記したように、かなり無理を押し通す形で行われている。いかに国会議席の三分の二を確保したとはいえ、FIDESZ による法律制定の強引さ目に余る。しかし、それを考慮しても、EU 議会の批判の多くは誇張されたものでフェアとは言えない。そこには政治各派の思惑やハンガリー人同士の争いが反映しているから、言葉通りに受け取っては事を見誤る。

実は、チェコが議長国に就任した時も、EU 懐疑主義者のクラウス大統領にたいして、EU 議会はその演説の始めから終わりまで、ヤジの大合唱だった。この種の批判は EU の新参加者にたいする通過儀礼のようなものだから額面通りにとる必要はないが、EU 議会で発せられた非難の中には大きな誤解も含まれている。議会各派の思惑も混ざっている。それを整理して見る必要があるだろう。

江戸の敵を長崎で

昨年の総選挙で FIDESZ が議席の三分の二を確保してから、国内で FIDESZ に対抗できる政治勢力がいなくなった。政治勢力だけでなく、国内の反 FIDESZ の知識人の発言の機会も少なくなった。それは政府が弾圧しているからではなく、一つの政治勢力が圧倒的な力をもっている状況の中で、政権に反対する声がかき消されてしまうからだ。

もっとも、旧左翼系知識人の多くは反 FIDESZ というより、反オルバンである。国外で活動しているハンガリー人知識人の多くも反オルバンである。オルバン首相は良くも悪くもそのカリスマ性で FIDESZ を統治している。FIDESZ はいわばオルバン個人党のようなもので、その「独裁的」振る舞いが知識人の肌合わないのである。もっとも、一般庶民には天才的な政治家として映るようだが。

ハンガリーのメディア法が EU 議会で注目されるようになったのは、在外ハンガリー知

識人の力が大きい。とくにドイツやオーストリアに在住している知識人、たとえばノーベル文学賞を獲得したケルティース・イムレや同じく作家のコンラッド・ジョルジュ、オーストリア・メディア界の実力者になったポール・レンドヴァイなどの発言力が、西欧の知識人世界に強い影響力をもっている。とくにレンドヴァイは旧社会党政権ときわめて近い関係にあり、昨年は FIDESZ 系の週刊誌 *Heti Valasz* でカーダール政権との癒着を指摘されて、FIDESZ へのリヴェンジに燃えていたからなおさらだ。

これに国内の有力知識人が連動して、国内で影響力のない分を国際的な舞台で補完している。国内の旧社会党政権に近かった知識人がいわば「江戸の敵を長崎で討つ」かのようになり、ドイツを中心にメディアへの露出を高め、EU 議会でのオルバン攻撃に向かったのである。

オルバン首相にしてみれば、これらの批判は「犬の遠吠え」だから国内政治に直接影響があるわけではないが、EU 議長国に就任した途端にハンガリー国内法であるメディア法に多くの時間を割かざるを得ないのは大きな誤算だった。ハンガリーのプレゼンスを上げるチャンスなのに、それどころかハンガリーのイメージを傷つける議論が蔓延している。EU 議会では各派の批判をはねつける態度を示したが、そこは賢い政治家である。このままではすべてが台無しになるから、EU 委員会の勧告があればそれに従うことを約束して、この問題の鎮静化を図っている。

ただ、FIDESZ の政治家のなかには次から次への奇妙な法案を提案する者がいて、たとえば「18 歳未満の子供の選挙権を親が行使する」という提案を真面目に憲法改正法案に提案しようとする者もいる。世界で最初の試みだと自画自賛しているようだが、いくら三分の二の議席をとったらかとって、何でも自分たちの思うようにできると考えるのは、やはり民主主義の意識レベルが低い。その意味で、メディア法で国際的な批判を受けたことからもっと学ぶべきだ。そうしないと、FIDESZ が編み出す「新機軸」がすべて EU 基準との係争問題になりかねない。

ドイツのホルン・ジュラ信仰

それにしても、ホルン・ジュラにたいするドイツ政界の評価は首をかしげる。1989 年 9 月のオーストリア国境開放時に外相だったことが、ホルンの過大評価を生み出した。たまたまホルンは改革派に理解を示して外相ポストを得たのだが、もともとは共産党本部（社会主義労働者党）の外交責任者であり、政治局員の覚えも良く、外務省で要職に就くことができた。ソ連留学を経験し、ソ連支配を容認し、1956 年「革命」を否定するホルンは、旧体制を支えてきた党官僚である。

ドイツの政治家は 1989 年 11 月のベルリンの壁崩壊を惹き起したハンガリーの役割を忘れてはいない。ハンガリーに大量に滞留した東ドイツ国民の西側世界への脱出を決めた当時のネーメット政権にたいする思いは強い。とりわけ、交渉当事者だったネーメット首相とホルン外相への感謝の念は今なお語り継がれている。しかし、実際に国境開放への道

を開いたのは、ポジュガイ・イムレや旧共産党の解党を進めた改革派たちであった。ネーメットやホルンはいわば歴史の偶然で、国境開放交渉時の窓口当事者だったに過ぎない。しかし、歴史は表舞台に立った人のみにスポットライトを当てる。

ドイツ首脳は体制転換直後の自由選挙で社会党が負けた時も、「優れた政治家ホルンを外相に」と、当時のアンタル首相に進言したと言われている。それほどまでにネーメットやホルンにたいしてドイツは義理固い。ホルンへの叙勲が二度にわたって大統領から拒否された時も、「何故にホルンほどの優れた政治家が顕彰されないのか」と疑問が呈したほどだ。しかし、ホルンは紛れもなく旧体制の人脈を受け継ぐ、旧共産党の党人である。1956年が反革命だったという信念に変わりはない。もっとも、何故そのような人物が変革期の改革派と看做されたのか、またホルン自身がどのような思惑で改革派の潮流に加わったのか、人物伝としてその辺りの事情の方がよほど面白い。

一人の個人としてみたホルンは、間口を広く開けていて、自分に寄り添ってくる人物を排除するようなタイプではない。親分タイプで、利益を独り占めにするというより、自分が祭り上げられる代わりに、利益を配分するというタイプだ。だから人に嫌われることはないが、利にさとい連中に利用される面があったことは否めない。その点でロシアのエリツィンに似ている。

その脇の甘さが社会党に腐敗を蔓延させた。ホルン政権の最初の官房長官に旧政治局員アプロー・アンタルの娘ピロシュカを据え、彼女に事務能力がないと分かると、銀行頭取に就任させるなど、旧共産党（社会主義労働者党）の有力幹部や本部官僚を取り立て、彼らが国家資産を横領するのを止めることができなかった。旧共産党の財務責任者マーティ・ラースローもまた、ホルンの片腕として、国家・党資産の横領に力を発揮した人物である。マーティらは **Nador 95 Rt.** という各種経済犯罪に絡んできた会社の事実上の所有者である。ホルン政権は事実上、旧体制人脈に立脚した政権だったのである。

第一次 **FIDESZ** 政権が敗北して樹立されたメツジェシ政権もまた、基本的にホルン政権の性格を受け継ぐものだった。メツジェシからジュルチャーニイという流れは、旧共産党系の人脈の世代交代を意味したに過ぎなかった。その綿々と続いてきた旧体制の人脈が昨年総選挙で崩壊したのである。

三分の二独裁

三分の二の議席をとれば、国会の各種委員会は **FIDESZ** の議員で溢れかえっている。右を見ても左を見ても、皆 **FIDESZ** の同僚議員で、その間に数名の野党議員が混ざっているというのが、現在のハンガリー国会。これがいわば「三分の二独裁」。すべてのことは **FIDESZ** の意向で簡単にきまってしまう。

ただ、こうした状況をチャヴェスやルカシェンコと比較するのは間違いだろう。**FIDESZ** は投票操作やポピュリスト政策で政権を取った訳ではない。底なしの腐敗という社会党のオウンゴールで、**FIDESZ** が大勝したのだ。そのことを知ってか知らずか、あたかもデマ

ゴーク・オルバンが国民を欺いて政権を奪取したかのように非難されるのは、どう考えてもフェアではない。

しかし、**FIDESZ** 側も良く考える必要がある。三分の二の議席を確保できたのは、小選挙区制のマジックからだ。全国比例区の **FIDESZ** 得票率は **52.7%** で過半をわずかに超えたにすぎず、野党の得票率の合計が **43.6%** だからその差はわずか **9.1%** に過ぎない。このことを考えれば、ハンガリー国民がこぞって **FIDESZ** を支持したわけではないことは明らかだ。だから、「三分の二」を背景に「何をやっても良い」と考えるのは間違っている。**FIDESZ** に賛同しない有権者がかなりの数で存在することを前提に、施策を行うことが肝要だ。その謙虚さを失えば、その付けは自らに回ってくるだろう。

(関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)